

「素直、おめでたい、よくばり」が伸びる秘訣

馬場 健史



飲み会の席で自分の経験をネタとして何度かお話したことがあるのだが、キャリアデザインの記事として文章にしてほしいと今回執筆の依頼をいただいた。少し変わった私の経験が参考になるかどうかわからないが、何か一つでも役に立つことがあればと思い、筆を執った次第である。

岡山大学での学生時代、そのあとの二つの会社での企業経験、そのあとの再び大学に戻っての学生（博士課程）時代、そのあとの企業でのポスドク経験、そして大阪大学でのアカデミア（助手、助教、准教授）経験と、それぞれの時期に分けて、記載させていただくことにする。

学部、修士課程時代

父が微生物を使った無農薬農業をやっていて微生物に非常に興味をもっていたことから、大学は農学部を目指すことにした。岡山大学農学部に入学し、研究室に入ったら微生物の研究をしたいと思っていたのだが、研究室配属の際に不運にもくじ引きにはずれて、天然物化学の研究室に行くことになったのである。ずっとやりたいと思っていた微生物の研究が一生できないぐらいに思って、配属が決まった研究室に行きたくないと当時学年担任だった馬場直道先生を大変困らせた。今思うとまったくそんなことはなかったし、また微生物の何を研究したいかもよくわかっていない状態で駄々をこねていた自分が本当に恥ずかしい。そんな私が今、分析化学をベースとして研究ができるのは、この時代が原点であることは言うまでもない。はじめは有機化学にまったく興味のなかった私だったが、直属の先輩であった小口さんが優しく丁寧に手取り足取りご指導してくださったおかげで、モノを分離し構造を決める楽しさを知ることができた。また、秋山さん、田井さん、大西さんなど素晴らしい博士課程の先輩がおられた緊張感のあるレベルの高い環境で日々過ごさせていただいたことも今から考えると非常に大きかったと思う。分析の面白さ、魅力をこの時

代に刷り込まれたことで今の自分があるとつくづく思う。

企業経験

修士課程の就職活動の時期に、博士課程に進みたいと思い悩んだ時期があったのだが、家庭の事情もあり企業就職の道を選んだ。みんなと同じようにいろいろな会社をまわって就職活動をしていたのだが、大阪の納豆菌の培養液を製造している会社の面接を行った時に、これから新しく研究所をつくるから是非入社してほしいと言われ、その会社に就職することにした。その会社では、一年目から岡山県立大学、倉敷芸術科学大学の須見洋行先生の研究室に出向させてもらい、ナットウキナーゼの研究をさせてもらった。毎日研究の充実した日々を過ごしていたのだが、恩師の小林昭雄先生から「おもしろいベンチャーの会社があるから」と突然連絡があり、1年1か月後に神奈川県のその会社に移ることになった。その会社は好熱菌を用いた廃棄物の再資源化をビジネスとしていて、昔やりたかった微生物の有効活用に関係する仕事だったのと、恩師の先生の言うことは聞かないといけないと思っていたので、転職を決めた。その当時としては、先駆けてバイオリファイナリーに取り組んでいたことから将来性もあったのだが、規模の小さいベンチャー企業はちょっとしたことで状況が大きく変わってしまうことがあり、残念ながらその会社はなくなってしまった。ただ、そのベンチャー企業に入社するときに大阪大学で博士号をとらせていただけるということで夏に試験を受けて合格していたため、4月には純粋な学生として入学したわけである。実は、博士課程に行かずに他の会社に就職することもできたのだが、企業に就職して世の中にはすごい人がたくさんいることを知り、今後自分がその人達と勝負していくにはもっとレベルアップしないといけないと身をもって感じたことから、博士課程進学の道を選んだのである。

著者紹介 九州大学生体防御医学研究所（教授） E-mail: bamba@bioreg.kyushu-u.ac.jp

博士課程時代

行きたかった博士課程によく入ることができたのだが、入ってみて自分の考えが甘かったことにすぐに気づいた。博士課程に入れば博士号が取れると思っていた、すなわち、研究テーマは先生から渡されてそれをこなせば良いと思っていたことが大きな間違いであることがわかった。博士は自分で研究提案し、結果をまとめて論文にしないといけないということが、まったく理解できていなかった。小林研究室では、自分の研究テーマを提案しなければいけなかったため、来る日も来る日も文献を調べて研究のプロポーザルをつくって先生のところに持つていってはダメ出しをくらってやりなおす毎日を繰り返した。1年以上研究テーマの提案をする日々が続き本当につらかった。こんなことをしていくつになら研究を始められるのか、何年たったら卒業できるのかを考えると、何度も何度もやめようと思ったことを覚えている。幸いにも、「3年間は一生懸命やる」と妻と約束していたため、途中でやめることができず何とかがんばれたのだが、普通は途中でくじけるように思う。もちろん、慣れないうちはある程度レールを敷いてもらった道を進んで成功体験を得ることも大切だが、やはりどんなに時間がかかるとも、どんなに苦しくても、自分で道を開拓して進む術を身につけることは、研究者として生き残っていくためにもっとも大切であることを今になってつくづく思う。指導教員の先生方としては、本当は研究を効率的に進めないといけないことから事細かに指示するほうが良かったのかもしれないが、学生の将来を見据えて能動的な能力を開発するためのチャンスを与えてくださったのだと思う。その当時何も分からず「先生は何でもっとちゃんと指導してくれないのでだろう」と愚痴を言っていたことを今は心から反省している。この時期に自分で研究提案を考える訓練をさせていただいたことで今の自分があることを強く認識し、先生方に本当に感謝している。

ポスドク時代

博士の取得目処がついた段階で単位取得退学し、日立造船に所属し、NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）のプロジェクトの研究員として、トチュウの產生するポリイソプレンの生合成メカニズムの解析と工業原料生産に向けた技術開発に取り組んだ。それまでの大学での研究と違い、フィールド調査や工業生産に向けたスケールの大きな仕事の経験をさせていただいた。

トチュウの原産地の中国へも何度も行かせていただいたのだが、それまでほとんど海外に出たことがなかった自分にとって、世界の広さ、まさにこれから発展しようとしている国の大勢、中国人のたくましさ、貪欲さなどを体感し衝撃を受けるとともに人生観が大きく変わったのを覚えている。インターネットが発達している現在であるが、やはり現地に行って体感することの大切さを実感した。できるだけ若い時期に違う世界を自分の目で見ることを是非お勧めする。また、ポスドク時代に、大型の国々のプロジェクトに携わる機会を持てたことは非常に大きかったと今になってつくづく思う。はじめは研究以外のいわゆる雑用が多く大変だと思っていたのだが、研究を進めるためにはマネジメントがいかに重要であるかを理解させていただいた。いかに緻密に練り上げた計画を立て、複数の人が並列して行っている研究開発の進捗状況を把握し、必要であれば調節し、プロジェクトを成功に導くか、また、プロジェクトを遂行するための継続した経費や人材の確保、運用がいかに重要であるかは経験しないとわからないし、身につかない。その貴重な経験をさせていただいたことが、現在の研究室やプロジェクトの運営に大いに活かされている。

助手、助教、准教授時代

ポスドクを5年ほどして35歳になったころ、そろそろ定職につかなければいけないと考えていた。その時、ある企業からお誘いをいただいたのだが、同時に大阪大学薬学研究科の平田收正先生より助手のお話をいただいた。実は、ポスドク時代、アカデミアの厳しさを目のあたりにして自分にはアカデミアの道は無理だと諦めていた。また、この年齢で助手になんでもその次のポジションに上がっていけるか不安だった。企業に行くか、大学に行くか、本当に悩んだが、結局、これまでと同様、すべて運命だと考えるポジティブ思考でアカデミアの道に進むことにした。私の人生にとってここも大きな分岐点と言える。今から思うと、このチャンスがなければアカデミアの道を進んでいなかったと思うので、お声をかけてくださった平田先生には本当に感謝している。

薬学部でアカデミアの道をスタートして2年ほど経った時に、大阪大学の工学研究科の生命先端工学専攻で准教授の公募があった。研究室がようやく立ち上がって回り出した時だったので非常に悩んだが、平田先生もチャンスだからと背中を押してくださったこともあって、応募することにした。それまでも会社を含めて何度か仕事先を変えたが、いつも嫌になって出て行くのではなく、

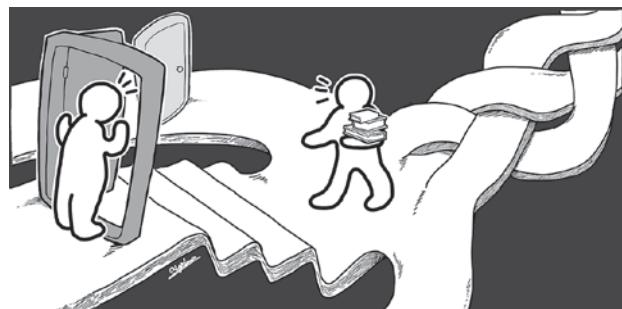
むしろこれからがんばろうという時ばかりで、自分がいなくなることによって迷惑をかけることもあり、本当に今動くことが正しいのか悩んだのを覚えている。今から考えると、いろいろなところで経験を積ませていただいたことが大きかったとつくづく思う。また、異動したあともそれぞれと共同研究をさせていただいたりして良い関係でお付き合いいただき、結果として人脈が広がることになり、そのおかげで現在幅広い研究ができていると思う。自分が研究室やプロジェクトを主宰するようになった今は、若い人に対して、私がみなさんにしていただいたように別のところで新たなキャリアを積めるようにチャンスがあれば喜んで送り出してあげるようにしたいと思う。

福崎英一郎先生には、博士課程学生時代にも大変御世話になったのだが、准教授時代にも本当にいろいろとご指導いただいた。研究室運営、学生の指導、教育、その他いろいろなものを教えていただき、物事をロジカルに考えることの重要性を改めて認識させていただいた。また、研究のすみわけについても多大な配慮をしていただいた。これが、私が今のポジションを得ることができた大きな要因といえる。超臨界流体クロマトグラフィー(SFC)という素晴らしい研究テーマに出会ったのも大きかったが、SFCを私の研究テーマとしてすみわけていただき、論文のラストオーサー、コレスポンデイングを配慮していただいた。研究者として生き残っていくためには、自分の看板を見つけること、それをちゃんとアピールして自分のものとすることの重要性を教えていただいた。今後、自分のグループの人たちに対しても同じように研究のすみわけとそれぞれの看板を持ってもらえるようにしていきたい。

おわりに

今回、私の少し変わったキャリアについて、その時どのように考えたかなども入れて書かせていただいたのだが、参考になっただろうか。文章の中には「今になつて」というフレーズが多く見られたと思うが、若い時には素直に受け取れなかつたこと、理解できなかつたことを後悔しているからこそ、今回この原稿を書かせていただいたことを、学生を含めた若い方に是非ご理解いただきたい。

この原稿を書いて改めてわかったことは、恩師の小林先生がいつもおっしゃっていた、伸びるために大切な3つのこと「素直、おめでたい、よくばり」が、その通りであることであった。何事にも貪欲に一生懸命取り組んで、どんなにつらいことしんどいことがあっても前向きに取り組んで、言われたことはなんでも素直に受け止める、これがまさに成長、いや成功の秘訣だとつくづく思う。最後に、いろいろ悩むより運命と思って信じて身を委ねて、あとは決めたら迷わず前だけを向いて進んで行く、後ろ向きにとらえれば苦勞として嫌になるが、前向きにとらえれば試練として乗り越えられる、これが私の自分の経験から学んだ人生をうまく楽しく生きる秘訣である。



<略歴> 1996年3月 岡山大学大学院農学研究科修士課程修了、1996年4月 株式会社日本生物科学研究所研究員、1997年5月 株式会社JBDL主任研究員、2001年3月 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得退学、2001年4月 日立造船株式会社主任研究員（NEDOプロジェクト博士研究員）、2001年11月 大阪大学大学院工学研究科学位博士（工学）取得、2006年4月 大阪大学大学院薬学研究科助手（2007年同助教）、2008年4月 大阪大学大学院工学研究科准教授、2015年3月 九州大学生体防御医学研究所教授

<趣味> テニス、お酒、雀

（イラスト：本條 綾子）